

これからの社会を 生きる力を身に付けるために



岡崎市長 内田 康宏 氏

教育随想

乙川沿いには、桜の花が咲き誇り、歴史深いこの岡崎の地に、今年もまた新しい春が訪れています。小中学校では、新入生たちが、今から始まる学校生活に期待をふくらませていることでしょう。

さて、自分自身の子供時代を振り返ってみると、私が半世紀ほど前に受けた義務教育は、現在とは随分違うものでした。まだ戦前・戦中の価値観も少なからず残っている頃であり、当然教育にもそういった影響が感じられました。

教育のあり方も社会のシステムも時代の変遷と共に移り変わってゆくものであります。かつて、当たり前とされ、「愛の鞭」と言われて許容された厳しい指導よりも、子供に寄り添うことが中心の教育となりました。

昔の教育が、管理教育として批判され、子供の個性や自主性の尊重が強く求められています。

しかし、個性とか独自性と呼ばれるものが、真に価値あるものとして



令和7年4月1日

4月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想……………	1
岡崎市長 内田 康宏 氏	
この人に聞く……………	2
落語家 桂 鷹治 氏	
羅針盤……………	2
城北中学校	
校長 山本 則夫	
ふれあい……………	3
岡崎小学校	
教諭 立石安祐美	
特集……………	4
令和7年度 岡崎の教育	
お知らせ……………	6
フォト・ヒストリー…	8
学芸会での鼓笛演奏初披露(昭和42年)	
この本を……………	8



発現してくるためには、当然のことながらその土壌となるべき基礎知識や経験が必要となります。また、様々な人々が混在する社会の中で生きてゆくためには、最低限の集団行動ができる訓練が必要となります。そうしたことを、「個人の自由」の名のもとにすべて否定することに疑問を感じることもあります。

現在、社会に適応することが難しいと感じている人々が増えていると言われています。学校と家庭と地域がしっかりと連携し、これからの社会を生きるために大切な基礎的基本的な力を、今こそ身に付けさせていく必要があるのではないのでしょうか。

まずは、すべての土台となる各家庭における基本的な社会的マナーの指導、あるいは生活のルールについて、親子で話し合う機会を持つことが必要ではないかと思う今日この頃であります。

今後、皆様の生活を支え、家庭や学校における子供たちの健全育成を推進する市政を進めてまいります。そして、安心・安全な教育環境の整備・充実に努め、岡崎の地で育つ子供たちが、一人一人の可能性を開かせて、「持続可能な社会の創り手」として大きく成長することができようように全力で応援してまいります。

(うちだ やすひろ)

落語は自分を映す鏡

落語家 桂 鷹治氏

落ち着いた雰囲気であらゆる姿は、三十五歳という若さながらも聴く者に安心感と重厚感をもたらす。生活が落語そのものとなっていると話す鷹治さんの生き方に迫る。

—落語家を目指すきっかけは—

男川小学校二年生のとき、落語クラブの顧問の先生に「四年生になったら来なさい」と声をかけてもらったことです。同居していた祖父母が披露の場を楽しみにしてくれて、着物をお借りしてくれました。大勢の大人を相手に一人で話すことは、緊張しましたが、お客様に笑ってもらえたことがうれしくて、三年間クラブを続けることができました。

大学生になり、落語を聞いていてと誘われたことが縁で落語研究会に入りました。部員が少なく、存続



の危機を抱えていました。そのため、一年生から部長を任せられ、地域のイベントや全国大会の運営に奔走しました。「自分に与えられた役割を全うしよう」と取り組み中で、多くの方々との交流できたことが今の糧になっています。いざ就職を考えたと、人との縁が深まっていた落語家という仕事があったと思いました。東日本大震災の後でもあり、両親から、「好きなことをして生きるのがいいのではないか」と後押しされ、師匠に弟子入りすることを決めました。

—よりよい落語にするために日々心がけていることは—

落語は耳と頭で覚えます。何度も音源を聞いて、文字に起こして言葉の意味を調べながら自分のものにしていきます。落語は落語家の話す言葉から、お客様が頭の中に状況を描いて楽しんでもらう芸です。だから、イントネーションが少し違っただけでも耳に留まり、はなしのおもしろさが伝わらなくなることがあります。なるべく引っかけがなく聞いてもらえるように心がけています。

また、伝統を現代風に変えていくことは、落語が現代の人々に受け入れられるためにも大事なことです。普段の身の回りでも起きていることは、落語の演目に似ていることが多いように思います。そう思うのは、機微を感じ取り、笑いを見出す

生き方になっていくからです。しかし、古典落語は江戸時代の庶民の生活を題材にしています。その世界観が崩れすぎないように気をつけていかなければなりません。

—落語家として、これから大切にしていきたいことは—

入門して十二年経ちますが、学生のころから関係が続いている落語家の方が多くいます。また「落語が好きだからもっと上手になりたい」という同じ志をもった仲間も多くいます。目標とする真打にふさわしい落語ができるように、自分の技術を高めていかなければなりません。

そのために、先輩後輩に関係なく、上手な人の落語を舞台袖から聞くようにしています。「この人はこうやるが、自分ならこうやる」と分析することも大事だと思うからです。そして、自分の感覚だけに頼ってしまうとどこかでつまづくので、自分を客観視するようにしています。落語を通して、自己表現できるように、自分磨きを続けていきます。



氏名 かつら たかし
(高木 陽輔)
生年月日 平成元年
六月二十二日
出身校 男川小・美川中

学び続ける教師を目指して

城北中学校

校長 山本 則夫

「定員を大幅に超えています。」

理科部の研修担当者から連絡が入った。冬の理科部の自主研修会に想定した二倍以上の希望者が集まった。理科部としては嬉しい悲鳴である。

OECDの調査で日本の小中学校教員は世界一の長時間労働であることが明らかとなった。また、教員の多忙感を抱く理由のひとつに各種研修もあり、かつて企画されていた自主研修でさえ削減・縮小されている。しかし、研修は私たち教育公務員としての義務であり、働き方改革とは、別問題である。教員の業務が精選され、時間が生み出された今、研修はむしろ充実されるべきではないか。

他国の教師の研修に目を転じてみたい。私がかつてアメリカで共に働いた教師は、長期休業中に、自費で教科の専門性を高めるための研修に参加したり、大学の修士課程のプロ





まっすぐ取り組む心

岡崎小学校

教諭 立石 安祐美

「これは、金賞の出来だな。」

読書感想画を描き終えた二年生のAさんは、満足げにそう言った。

Aさんには、一年生のときから抱いている夢がある。それは、絵を描く会で金賞を取ることだ。一年生のとき、友達の絵に貼られていた金紙を見て、「次こそ、金賞を取る」と目を輝かせながら話していた。それを聞いた私の心の中には二つの思いが生まれた。「目標に向かってまっすぐ頑張ろうとする姿は素敵だ。応援したい」という思いと「たとえ金賞を取れなくても、熱中して描く楽しさに気づいてほしい」という思いだ。

Aさんが、二年生の読書感想画で最初に描いた下絵は、登場人物が横一列に描かれていたものだった。

「Aさん、この場面で一番大きく描きたいものはある。」

Aさんの絵を動きのあるものにす

るために、私はそう尋ねた。

「魔女かな。」

理由を尋ねると、大きく描いて、怖さを表現したいとのことだった。

Aさんは、画用紙の三分の一くらいの大きさで魔女の顔を描き直した。

その後、友達の下絵からさらに工夫できる場所を見つけてほしいと思いい、互いに下絵を見合う機会を設けた。すると、Aさんは、魔女の顔を逆さまに描き直していた。

「すごい。逆さまだ。どうして逆さまにしようと思ったの。」

「Bさんの絵を見たらね、コンドルに魔女が負けたときの顔を逆さまに描いていたの。だから、やってみた。」

「すごい。大きいから迫力があるね。」

Aさんは、満面の笑みを浮かべながら、

「今までで一番いい絵になるような気がする。」

と言って、黙々と、下絵を仕上げていった。

一通り色を塗り終わると、Aさんが元氣よく尋ねてきた。

「先生、どう。」

「上手に塗れたね。もっとかっこいいコンドルにするために、羽の黒色を濃く塗れるといいね。」

普段、Aさんはすぐに色塗りを終わらせてしまう。隙間なく丁寧に塗れば、Aさんの思いに近づく。そし

て、一人一人の登場人物にこだわってほしいと考え、そう助言した。すると、Aさんは、真っ黒に羽を塗り上げた。

「先生、もつとよくできるところはある。」

私に何度も確認しながら、真剣な表情で、根気強く絵を仕上げていった。完成した絵は、Aさんの思いがたくさん詰まったものとなった。

「これは、金賞の出来だな。」

そう言ったAさんは続けて、

「先生、絵って楽しいね。次も早く描きたい。この逆さまに描いた魔女、最高だよ。」

「そうだね。逆さまもすごいし、諦めずに黒を塗り切ったのもすごい。よく頑張ったね。」

私が答えると、

「そうでしょう。」

と誇らしげに言って、去っていった。その充実感あふれる背中に、私もなんだかうれしい気持ちになった。



グラムを受講したりして上位の学位取得に取り組んでいた。彼らの専門分野に対するプロ意識は、非常に高く、自分にとって有益な研修への参加に多忙感はない。もちろん家族とゆったりと過ごすことも忘れない。

若手の先生から教材や指導方法について質問を受けることがある。私がこれまで培ったものを伝えたいと張り切るが、何かが違う。昭和、平成、令和と時代は流れ、教育環境が一変した。タブレット、電子黒板等、ICTを駆使した授業は当たり前となった。自身の教材観、指導観のアップデートが必要であることに気付く。しかし、教師が夢中になって教材を研究し、練り上げた授業は、輝きを失わないのは、今も昔も変わらない。教師にとってかけがえのない宝物となる。

四月の第一回職員会、「教師は、新任もベテランも教えることのプロ。自分の特技は授業ですと、胸を張って言えるように」と、職員と自分へ向けて第一声を発する。私たちを取り巻く社会のグローバル化、情報化はさらに加速している。それに合わせて教育を巡る状況も刻々と変化している。教師自身もたゆみなく知識技能の刷新に努めなくてはならない。教師を終えるその瞬間まで学び続ける教師でありたい。



令和7年度 岡崎の教育

岡崎の教育が目指すもの

教育の目的は、教育基本法第一条に示されているように、「人格の完成」である。さらに、同法第二条の中には、教育の目標として、「幅広い知識と教養を身に付け、心理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」とある。

つまり、学校教育には、子供が人として生涯に渡り、心豊かで、力強く生き抜くための基盤となる能力を育成すること、言い換えれば、知・徳・体の調和のとれた、感性豊かな人間形成を図ることが求められているのである。そのためには、教師の子供の幸せを願う強い思いと人間形成への情熱が不可欠であることは言うまでもない。

特に、令和七年度の学校教育の指導の重点として、次の三点を示す。各校の教育実践の基盤としたい。

○学ぶ楽しさを実感し、深く考え、学び続けるための「確かな学力」を育む教育の推進

○命の尊さやふるさとの大切さを自覚し、共に生きるための「豊かな心」を育む教育の推進

○体を動かす楽しさを体感し、たくましく生きるための「健やかな体」を育む教育の推進

言葉と背中の子供を導く岡崎の教師

子供にとって保護者は最も身近な存在であり、心身の発達に大きな役割を担っている。ただ、学校で子供と多くの時間を過ごす教師の言動は、時とし

て保護者以上に子供の未来に影響を与える。教師の仕事の醍醐味はここにあると同時に、その責任は重い。故に岡崎の教師は、目の前の子供の心に常に寄り添い、いかにその成長を促すか悩み、試行錯誤しながら熱心に教育活動に取り組んできたのである。

休み時間に運動場に飛び出して子供を見送りつつ、教室で一人で過ごす子供に寄り添って声をかける教師。友達とのかかわりが苦手な子供の得意なことを見抜き、周りの友達に紹介し、自信をもって活動できるように配慮する教師。それら一つ一つの愛情あるかかわりの中で、子供は自らの成長の糧を得ていく。

本年度、新たに百人を超える新規採用者を仲間に加え、約二千三百人の教員が教壇に立つことになる。その一人一人の教員の愛情の結集に期待したい。また、私たちは子供にとってかけがえない存在になるべく研鑽に努め、自身の資質・能力を向上させ、教育に情熱を注ぎこむ集団でありたい。

岡崎が進める三つの教育改革

現在、教育界は大きな改革の流れの中にある。岡崎の教育も例外ではない。岡崎の教育が目指すものを見据え、次の三つの教育改革を確実に進めたい。

①「学び方改革」

憲法第二十六条で、すべての子供には学ぶ権利があるとし、親には教育を受けさせる義務を負うことを定め、義務教育を無償としている。その無償化された小中学校は、子供の学ぶ権利を

保障することは自明の理である。

子供には個性がある。そのすべての子供の学ぶ権利を保障することは、かなりの困難を伴うと考えられる。少なくとも教師主導型の一斉授業を展開しては不可能である。

子供は、目の前に砂場があれば、砂山を作りトンネルを掘り始める。近くに水があれば、それを少し流し、川に見立てて遊び始める。友達が加われば、協力し合ったり、競い合ったりする。このように本来、子供は主体的で対話的で深く学ぶものである。そのような学びを、各校の授業で実現したい。

本市ではその手立てとして、子供に学びを委ね、四人のチーム隊形を作り、教師はファシリテーターとして子供の学びを支え、広げ、つなげる役割を果たすチーム学習を進めている。

令和二年度の細川小、額田中の研究発表会でそのモデルが提示された。その後、毎年ブラッシュアップされ、昨年度までに、ほぼすべての学校でチーム学習が取り入れられるようになり、令和の教育のスタンダードな授業の形になりつつある。しかし、一つ一つの授業を見ると、その理念が教員に浸透しきっているかといえは十分ではない。子供に学びを委ねるのではなく、実は放置していたり、チーム学習をチームで話し合うことと誤認したりしている授業を見ることがある。これまで取り組んできたチーム学習を核とした授業改善をさらに進め、すべての子供の学びを保障したい。

【重点努力目標】

- ・チーム学習を核に、個別最適な学びと協働的な学びの充実を図る。
- ・特別活動を活用した自主的で協働的な学び、総合的な学習を活用した探究的な学びを推進する。

- ・小学校において教科担任制を取り入れ、教科の見方や考え方を使った学びの深化を図る。
- ・リアルな学びを支えるデジタル教科書や電子黒板を活用した授業実践の研究を進める。

② 「子供支援改革」

三十四万六千四百八十二人。

これは令和六年度、文部科学省が公表した令和五年度の小中学生の不登校者数である。実にこの四年間で約十五万人増加しており、一部の学校では全校の子供の数の10%にも及ぶところがある。まさに、危機的状況である。

一方、本市はこの状況を機敏に察知し独自の対応をしてきた。その核となる施策が校内フリースクールF組の開設である。F組の理念の浸透により、長期欠席の子供が学校に通い始め、また、その広がりにより新規の長期欠席者数を抑えることができた。

「制度や仕組みそのものが人を救うのではなく、そこに携わる人そのものの人間性、人生観、人としての温かさが救うのである」という考えを私たちは大切にしている。家庭事情や友人関係などから困り感を抱え、生きること不安を覚える子供が増加している。生徒指導提要でも示されている発達支持の生徒指導の考えやF組の理念の浸

透は、長期欠席で困っている子供たちに限らず、在籍している子供たちすべてに還元されることで、学校が貴重な居場所になると確信している。本年度もスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー事業等、子供を支える制度の充実を図っていく。

【重点努力目標】

- ・中学校二十校と小学校五校に設置した校内フリースクールF組、中学校十校に設置した夜間学級S組を効果的に運用する。
- ・いのちの教育を推進するとともに、スクールソーシャルワーカーや臨床心理士との連携強化を進め、子供にとつて学校が安心できる場になるようにする。
- ・ストップ・ザ・いじめアクションプランのPDCAサイクルを図り、いじめの未然防止と的確な対応をとる。
- ・プレクラスの活用を進め、外国人児童生徒への指導・支援を充実する。

③ 「部活動改革」

令和二年度、文部科学省より「学校の部活動を地域に移行する」という大方針が示された。半世紀を超えて教師が中心となつて取り組んできた部活動は、これまで大きな教育的役割を果たしてきた。今や日本全国に広がり、貴重なインフラとも言える部活動、岡崎市の中学生約一万人が関わる部活動を地域に移行するには大きな混乱が予想された。

そこで、本市では「岡崎市立中学校地域ブロック部活動岡崎モデル三段階プラン」を立案した。昨年度までに

アーチェリー、弓道、ソフトボール、ハンドボールが地域ブロック化されている。地域ブロック化された部活動は、活動の時間が夜になったり、場所が公共施設になったり、企業の方が指導に加わったりするなど、移行が着実に進んでいる。また、教職員が兼職兼業の仕組みを活用し、自分の得意な競技を教えることも始まっている。

本年度夏には、いよいよすべての部活動を地域ブロック化する予定である。これで三段階プランの第一段階「子供の活動の地域移行」が終了し、第二段階「活動場所の地域移行」に入る。

近い将来、子供が希望した部活動に入り、教師が希望する部活動でやりがいをもって指導できるようになることを目指している。岡崎の教師の力で、持続発展可能な形で部活動の地域移行を実現したい。

【重点努力目標】

- ・中学校部活動において、「子供の活動の地域移行」を確実にし、第二段階「活動場所の地域移行」を円滑に移行できるよう取組を強化する。
- ・現職の教職員の兼職兼業による部活動指導員の確保を進める。
- ・コミュニティ・スクールの仕組み等を活用した小学校部活動の今後の在り方についての検討を進める。

これらの大改革の推進のために、岡崎の教師の力の結集をぜひお願いしたい。そして「岡崎の令和型教育」の姿を構築すべく、創造と挑戦の心を大切に取り組みたい。

未来を拓き、次代を生きる子供たちの資質・能力を育てるために。



●教育関係機関

◆岡崎市総合学習センター

○教育研究所

(1)教育図書室

学習指導案の閲覧、図書資料の貸出し、学芸会等のDVD資料の視聴ができる。

(2)教育アドバイザー

教育に関する様々なことについての相談ができる。

(3)学校運営アドバイザー

学校運営についての相談ができる。

◆岡崎市教育相談センター

教育相談部門と通所・登校支援部門、福祉的支援部門がある。

(1)教育相談部門には、「そよかぜ相談室」がある。

○そよかぜ相談室

就学支援・特別支援教育、いじめや長期欠席等に関する支援をしている。相談をする場合は、電話予約が必要となる。その後、通所し、臨床

心理士や相談員と相談する。また発達障がい専門家（大学教授等）が巡回相談を行っている。

(2)通所・登校支援部門には、長期欠席児童生徒教育支援センター「ハートピア岡崎」がある。

○ハートピア岡崎(竜美・上地)

長期欠席や、その傾向のある子供が学校への復帰や社会的自立を目指して通所し、指導員やハートピア専属の臨床心理士による支援を受ける。通所については、学校を通して手続きを進める。

(3)福祉的支援部門にはスクールソーシャルワーカーを配置しており、令和七年度も、十名を継続配置する。

○スクールソーシャルワーカー

子供が置かれている環境や、抱えている課題を踏まえ、関係機関との連携・調整や支援を行う。福祉や教育に精通した社会福祉士や教員OBが対応する。

◆日本語初期指導教室『希望』

(プレクラス)

岡崎市内の小中学校に編入学、転入学してくる日本語教育を必要とする児童生徒は増加傾向にある。それに伴

い小学生（四年生以上）・中学生を対象とした日本語初期指導教室『希望』（通称プレクラス）を南中学校内に開設している。

プレクラスでは、学校生活になかなか馴染めない日本語指導が必要な児童生徒が、安心して日本の学校に通うことができるように、初期段階の日本語の習得や日本文化への適応を図ることを目指している。

●表彰

◆第78回愛知県中学校総合体育大会

○陸上競技の部

・OP男子四種競技

1位 美川中 和知 志侑

◆第51回東海アンサンブルコンテスト

○小学生の部

・打楽器三重奏

優秀賞 朝日新聞社賞

持田 瑛太・藪崎 彩織

小林 環那

・金管六重奏

優秀賞 竜美丘小

天野 真維・土橋 晴仁

伊藤 りこ・神代 咲良

杉田慧太郎・後藤 愛梨

○中学生の部

・フルート三重奏

銅賞 竜海中

飯田 真優・眞鍋 実来

白石 麻衣

◆第37回中部日本個人・重奏

コンテスト愛知県大会

○中学生の部

・木管八重奏

金賞(本大会に進出) 矢作中

齋藤 美緒・深見 知花

三橋 柚奈・村瀬 彩葉

三井 花・西別當音歌

富永 ゆい・清水 彰悟

・金管八重奏

金賞(本大会に進出) 矢作中

太田みのり・奥村 統也

米津 双葉・河本 亜緒

中西 凜・木戸 颯彩

勝田 万陽・鈴木 来実

金賞(本大会に進出) 翔南中

畔柳 帆望・加藤 聖真

岩倉あかり・横山 和香

前田 菜摘・上葛 紗那

小川 朱音・西田 優依

・フルート

金賞(本大会に進出)

美川中 葛葉 奈桜

竜海中 眞鍋 実来

・サクソフォン

金賞(本大会に進出)

竜海中 下里 桜子

北中 北川愛莉紗

○小学生の部

・金管六重奏

金賞 竜美丘小

天野 真維・土橋 晴仁

伊藤 りこ・神代 咲良

杉田慧太郎・後藤 愛梨

・打楽器三重奏

金賞 竜美丘小

持田 瑛太・藪崎 彩織

小林 環那

・フルート

金賞

竜美丘小

栗山 怜美

・木管二重奏

銀賞

佐竹 志穂・池田 柚月

◆第70回青少年読書感想文全

国コンクール

○中学校の部

サントリー奨励賞

常磐中 賀来 彩乃

◆「早寝早起朝ごはん」アプ

リコンテスト

○アイディア部門

パナソニック教育財団賞

六ツ美中部小 清水 瑛斗

◆ライオンズクラブ国際協会

主催2024年・2025年

度国際ポスターコンテスト

リジョン優秀賞

生平小 山岡 美結

◆第38回感動作文コンクール

○小学校中学年の部

優秀賞

梅園小 渡邊 栞

学芸会での鼓笛演奏初披露 (昭和42年)

写真提供：夏山小学校

昭和四十二年、鼓笛演奏が初めて学芸会で披露された。鼓笛隊は前年度の額田町合併十周年記念大運動会を機に発足し、当時は、高学年が中心の演奏であった。本年度に至るまで五十年以上、夏山小学校の伝統として受け継がれている。現在では全校児童が取り組み、学芸会以外にも、卒業式後や退任式後の見送りの会で演奏する。夏山小出身の保護者や地域の方が多いため、自身の経験と重ねながら児童の鼓笛演奏を楽しむにしている。児童たちの手で脈々と受け継がれてきた学校の伝統行事は、地域の方々の思い出でもあり、愛され続けている。今後もしっかりしていきたい。



・題 字
・タイトルバック 教育長 安藤直哉
・各タイトル 六ツ美中 大竹紗弥加
・カ ッ ト 六ツ美中 大竹紗弥加
本宿小 浅井優子

殿様蛙の季語は春。冬眠から目覚めた蛙が元気に飛び跳ね、鳴く様子から、春の風物詩として親しまれてきた。新年度が始まり、子供たちは大きな希望とくばくかの不安を抱えながら、新生活に思いをはせる。今年も実り多き一年にできるよう元気よく飛び出し、笑顔と笑い声のあふれる四月としたい。

殿様蛙の季語は春。冬眠から目覚めた蛙が元気に飛び跳ね、鳴く様子から、春の風物詩として親しまれてきた。

ど ホ

卯 目 ツ



▲登校から教室まで6年生と一っしょに学校生活を始める1年生。(大樹寺小)

本物の落語をリアルで聴くこと。テレビやインターネットでは伝わらない、落語家が作り出すその場の空気を感じることは落語の醍醐味である。「多くの人との出会いを大切に生きてきて、今の自分がある。」と鷹治さんは言う。目の前の観客も。新大出の四月に、「一期一会」という言葉を心に留めた。

つぼみが花開く新年度。子供たちは期待に胸を膨らませ、新たな一歩を踏み出そうと、己の歩幅で精一杯に努力する姿を見せる。「ローマは一日にして成らず」と言われるように、努力は継続することが肝要だ。子供たちに努力の大切を学ばせることが出来る教師でありたい。



＊「叱らない」が子どもを苦しめる
敷下 遊・高坂 康雅
筑摩書房 ￥920

心に残った一文

大切なのは「思い通りにならないこともある」というメッセージを、折に触れて言葉で伝え続けることです。

親が子どもを叱るのは可哀そうと考える風潮が広まっているようだ。

学校ではどうだろうか。褒めて伸ばすことを大切にするのは勿論であるが、叱るべきときには叱ることのできる教師でありたい。著者は「子どもを適切に叱ることが子どもの心の成熟につながり、教室に入れない、登校できない子どもを減らすことにもつながる」と書いている。

私たち教師は、子どもの健やかな成長のために「適切に」の意味をよく考えながら叱ることができるようになりたい。

＊What's Next? 終わりのなき未踏への挑戦
平出 和也 ￥1,800

山と溪谷社
＊人間標本 湊 かなえ ￥1,700
角川書店

＊架空犯 東野 圭吾 ￥2,200
幻冬舎
愛知教育大学附属小学校 清水 孝治